《書評》

川本隆史『共生から』

児　島　博　紀　・　宮　城　　哲

Ⅰ．

はじめに

本書[1]は、東京大学大学院教育学研究科教員である川本隆史氏が、岩波書店の双書「哲学塾」シリーズの一冊として2008年４月に刊行したものである。これには著者の約10年前の仕事である『新・哲学講義６　共に生きる』(岩波書店、1998年)のイントロ講義「共生ということ」と、『新・哲学講義　別巻　哲学に何ができるか』(岩波書店、1999年) 所収の「人間の権利の再定義――三つの道具を使いこなして」がリニューアルされて収められている。目次は次の通り。

講義の七日間　共に生きる
第１日　「共生」の両義性
第２日　孤独と共生
第３日　ケアと共生
第４日　教育と共生
第５日　臨床と共生
第６日　エコロジーと共生
第７日　「あなたを苦しめているものは何ですか」
補講　人間の権利の再定義――三つの道具を使いこなして

第１日では、井上達夫や花崎皋平らに拠りつつ、「共に生きる」を原義とする「シンバイオーシス」(symbiosis)と「コンヴィヴィアリティ」(conviviality) の二つの単語の違いをもとに、異質な者同士の共存の側面に注意が促される。続く第２～６日では、孤独、ケア、教育、臨床、そしてエコロジーといった問題群と「共生」とのつながりを探っていく。第７日では、最首悟やシモーヌ・ヴェイユを引き合いに、「正義」とともに「注意力（ケア)」、「内発的義務」を問い続けることの重要性が説かれ、補講では、人権概念の編み直しが図られる。以下では、著者の他の仕事も射程におさめつつ、書評を綴ってみたい[2]。

川本応用倫理学の方法論的核心、反照的均衡

目次を一瞥すればわかるように、「～と共生」といったタイトルが目につく。ここにはケアやエコロジーといったテーマと「共生」とのつながりを思索した軌跡が表れている。このようにして「共生」と関連分野を突き合わせながらその均衡点を探っていくやり方の背景には、「反照的均衡」(reflective equilibrium) という方法論が控えているだろう。反照的均衡とは、言うまでもなく、ジョン・ロールズのユニークな倫理学方法論である。すなわち、まっとうな道徳判断＝直観を可能な限り集め、それらに整合的な定式化を与えるような道徳原理を帰納法的に探すと同時に、一定の科学を背景とする理論から演繹的に導出する方向でも道徳原理の正当化を探求し、これらを照らし合わせながら修正を施していく方法論である[3]。本書は、まさに反照的均衡の実践であると言ってよい。

実際、本書中にも何度か反照的均衡についての言及がある。

> 「私が馴染んできたロールズの倫理学方法論――ベースとなる道徳的直観と関連分野の理論とを相互に突き合わせながら、その両者をうまく釣り合わせる道徳原理を模索するという手法(「反照的均衡」) ――を「環境倫理」に適用することにより、…直観とエコロジーの理論との均衡化を私なりに追及していきたい」(p.84)

> 「現代アメリカの倫理学者ジョン・ロールズの「反照的均衡」という方法論に共鳴し…、生活に根ざした直観と科学の裏づけをもつ理論との間のフィードバックを通じて、倫理学の組み替えを企ててきたつもりの私」(p.108)

こうして本書では、孤独、ケア、教育、臨床、エコロジーといった諸問題との応用倫理学が試みられているが、著者の以前の仕事には法や経済を対象としたものもあり[4]、一貫して続けられてきた実践の延長線上に本書があることがわかる。また、本書中で参照された人物のほとんどが職業哲学者ではないことの理由を、「共に生きる」というテーマの然らしめた面であると述べてられているが (p.92)、これはむしろ反照的均衡を核とした川本応用倫理学の成せる業であると言うべきであろう。

ところで、本書とほぼ同時期に発表された著者の論文に「“不条理な苦痛”と「水俣の痛み」——市井三郎と最首悟の“衝突”・覚え書」[5]がある。水俣をめぐる市井三郎と最首悟の衝突の様相を、著者一流のフォローによって甦らせると同時に、「哲学」と「現場」の関係を浮き彫りにした作品であるが、評者の見るかぎりここでの方法論的支柱は二つある。それは既に述べてきた反照的均衡と、もう一つはアマルティア・センから受け継いだ脱集計化という手法である。

この論文で単純に著者が市井に向かって「反照的均衡を実践せよ！」と単純に主張していると解してはならない（むしろ反照的均衡だけでは漏れ出してしまうものを、脱集計化によって救い出そうとしたと言えるだろう）が、ここでは、それでもなお反照的均衡が著者にとって重要な位置を占めていた点を指摘しておきたい。

孤独と共生

本書が他の応用倫理学に関する書物と特に一線を画している箇所を挙げるとするならば、それは第2日の「孤独と共生」ではないだろうか。「孤独」と「共生」という二つの単語は一見して水と油のようであり、どう結びつくのかは想像しにくい。

ここで著者が取り上げるのは、詩人の石原吉郎である。ここで詩人を導きの糸とするあたりが、冷静な頭脳だけでなく、温かいハートも持った著者ならではの技だろう。

石原はシベリア抑留体験をもとに、互いの生命を侵犯しあうもの同士が連帯して共生にいたること、また孤独を抜きにしては成り立ち得ない連帯について語る。このことは著者を圧倒したという。そして、石原はシンバイオーシスとしての「共生」とコンヴィヴィアリティとしての「共生」という「二つの共生」の深奥に孤独を直観したのだと指摘する (p.27)。

さらに著者は、晩年の石原がひとつの単純な「共生の技法」を説こうとしていたというエピソードにも注目する。それは「日常生活をていねいに生きよ」というものである (p.30)。そして、ここから第3日の「ケアと共生」につなぐところに著者のうまさが光る。

このつなぎ方は、しかしながら、読者をさすがと唸らせる反面、ある種の歯がゆさをも感じさせてしまうものではないだろうか。石原が「共生」の奥底に見た孤独を「ていねいに」という言葉で片付けることは果たして可能か、残念ながら「共生」へとつながらない孤独も多々あるのではないか、という読者の疑念を完全に拭い去るものではないように評者には思われる。

とはいえ、この章が際立った特徴を有したものであることには違いない。

『共生から』が語らないもの

ここで、本書の内容から少し逸脱して、本書が語っていないことにも目を向けてみたい。それは「共生」という言葉の負の側面である。このことを問題にするのは、著者の議論に欠陥があると批判しようとするためではない。議論の欠落がすなわち議論の欠陥であるとは言えないからである。しかしながら、本書を越えてさらに私たちが「共生」について思考するとき、それは避けて通れない問題であるだろう。

本書が「共生」という言葉の有する豊かな意味をわかりやすく提示していることは間違いない。しかし、現実の世界で私たちが出会う「共生」という言葉は必ずしも著者が述べるようなものと同じではない。むしろそれと相当にかけ離れたものが数多く存在する。

たとえば、著者も懸念を示すような「米軍基地との共生」や「原発との共生」(p.4) という言葉を聞くとき、私たちは違和感を感じずにはいられない。これらは著者が語る理想的な状態とは明らかに異なるだろう。こうした〈「共生」の誤用〉とも言うべき事態は、日々のニュースの中からいくらでも探し出すことができる。

私たちが現実に出会う「共生」はつねにこうした誤用を孕んでいる。今も米軍基地や原発の建設予定地では、「共生」の名のもとに、本来対立すべき関係にないはずの住民同士が分断され対立して生活して

いる。その一つ一つの誤りを指摘する作業は途方もないものである。しかし、こうした〈「共生」の誤用〉に向き合う作業こそが、今求められているのではないだろうか。これは「同時代への応答」をモットーとする著者に対して、評者が期待していることでもある。

次に問題とするのは、私たちが世界の現実を前にすると、そもそも「共生」とは無理ではないかと思わせられるということである。パレスチナの惨状を伝え聞くとき、私たちは易々と「共生」を口にすることはできない。そうでなくとも、「共生」とは多分に対立・緊張関係を含んでいる。これは既に「孤独と共生」で確認したことでもある。

この、無理かもしれないということを、仮に〈「共生」の不可能性〉と呼ぶならば、それでも〈「共生」の可能性〉に賭けることが、私たちの希望だろう。

ところで、「共生」が対立・緊張関係を孕まざるを得ないことであることを考えるとき、評者が思い出すエピソードがある。それは、著者が長年敬愛し、本書中に何度も登場する花崎皋平と、徐京植との論争である。この論争は、花崎が在日朝鮮人としての徐の「コミュニケーション・モード」を問題にした論文を発表した際に、徐がただちに反論したことに端を発する。一連の論争の結果、花崎は徐とのコミュニケーションを放棄したともとれる行動に出る[6]。

ここで花崎の理論と実践の欠陥をあげつらうことは重要でないと思われる。むしろ長年「共生」について思索を続けてきた哲学者でさえ、〈「共生」の不可能性〉といった事態に陥りかねないのだという事実を確認すべきだろう。こうした、できればなかったことにして済ませたいような現実も直視する必要があるのではないだろうか。

一冊の本にここまで求めるのは無理があるかもしれない。しかし、「共生」にまつわるネガティブな問題群は現実には避けて通れないものでもある。著者のさらなる思索と応答を期待すると同時に、及ばずながら評者もその作業を共にさせていただきたいことをここに表明するものである。

反照的均衡か合意形成か

ここからは、本書の内容からさらに逸脱して、著者の応用倫理学方法論、反照的均衡と「共生」の負の側面とに関連したいくつかのことを（傲慢に）述べさせていただく。

「共生」をめぐる対立・緊張関係を前にして考えられる解答の一つに、合意形成を目指すということがあるだろう。ここではその典型例として、加藤尚武の応用倫理学を挙げてみたい。加藤は合意形成の学として応用倫理学を規定する。そのことは加藤の「国民の合意形成の方法論として、応用倫理学が役立つまでに、この学問を鍛えていくことが私の究極の目標である。」[7]という言葉に端的に表れている。

これについて著者は以前の仕事で、「国民」は名宛人として不適切である点を衝くと同時に、加藤に対して「自分がベースとする直観・問題意識を隠さず出して、それと諸科学の成果・行き詰まりとを綿密に突き合わせていく作業」[8]をこそすべきという、まさに反照的均衡に立脚した批判を行っている。

この図式を極端に言えば、著者の反照的均衡を核とする立場と、合意形成に重点を置く加藤の立場との対立であるだろう。しかし、ここで問題となるのは、この二つの立場は必然的に対立する、もしくは対立すべきものだろうかということである。著者による「国民」という名宛人の不適切さ、反照的均衡の不在という加藤批判は納得のいくものである。しかしながら、合意形成という目標それ自体までを否定し去ることはできないのではないだろうか。

〈「共生」の不可能性〉に対処するために、合意形成を目指すことは（それによって失われることも多いかもしれないが）、一つの重要な課題であるように思われる。あるいは、合意形成の不在が、対立・緊張関係として表出していると考えられるのではないだろうか[9]。合意形成を目指すことは、反照的均衡のそもそもの性格からも支持されうるものと思われる。

おわりに

以上、書評としての本来の目的からかなり逸脱して、さらに評者の領分を大きく超えて文章を綴らせていただいた。これはもちろん、著者のこれからの仕事に期待してのことに他ならない。また、評者自身が著者から頂いた課題としてこれから取り組んでいくことを覚悟してのことである。

その意味で、本書は私たちが「共生」を考えるために、まさに「ここから」スタートして哲学していくための、出発点を提供してくれている。

（児島博紀）

Ⅱ.『共生から』を「まなびほぐす」ために

〔…〕いよいよ本日の主題、「教育と共生」に入ります。でも少々気が重くなるテーマですね。いじめ、校内暴力、不登校、……といった学校教育を揺るがす深刻な事態を受けて、「生きる力」の育成が教育目標に盛り込まれたと思ったら、今度はゆとり教育による「学力低下」が喧伝される。「情報化」や「国際化」、「自由化」を謳い文句とする教育改革が推進されるかたわらで、歴史教科書の記述をめぐる論争が起こり、果ては「教育基本法」(一九四七年制定)の強引な「改正」(二〇〇六年一二月二二日公布)にまでいたりました。そして「教育の危機」や「教育再生」を訴える出版物や情報の洪水。そんな現状を見ていると、「教育」と「共生」を並べて論じること自体が的外れのようにも思われてもきます。(p.53)

本書『共生から』[10]は、「<発見と脱線のある入門講義>というキャッチ・コピーのもと昨年九月に刊行が始まった双書「哲学塾」」(p.151)の一冊であり、もともと「この小さな本は、『新・哲学講義6　共に生きる』(岩波書店、一九九八年)のイントロ講義「共生ということ」と『新・哲学講義　別巻　哲学に何ができるか』(岩波書店、一九九九年)に寄せた「人間の権利の再定義―三つの道具を使いこなして」の二作品を原型」(p.152)としたものである。その際、前者については、主に「文献データをアップデート」し、後者は「文体を会話体に直し」ている。もちろん、その他にも前著からの十年という歳月が、いくつもの加筆修正をほどこさせている。そのなかで、冒頭に挙げた引用は、まさにその重要な一場面であるように思われる。例えば、このなかで「「教育基本法」(一九四七年制定)の強引な「改正」(二〇〇六年一二月二二日公布)」の一事をとっても、この十年は「教育」(と、さらには「共生」)にとって、決して幸福な時間ではなかったのかもしれない。だが、だからこそ著者自身が冒頭の引用につづけて語っているように「ここであきらめてしまっては、「次世代育成」という大切な役目を放棄することになりかね」(p.52)ない。評者である私自身「何とか踏ん張って」みるためにも、本書から多くのものを学び、さらには「まなびほぐす」[11]糸口ぐらいは見つけみたい。この書評では、以下、三つのテーマから本書とその周辺をめぐり考えてゆきたいと思う。

1.「教育と共生」―その原理的な不適切さ・難しさ―

まず、はじめにふれた「教育と共生」という問題からはじめてみたい。

パウロ・フレイレ『被抑圧者の教育学』の訳者の一人である小沢有作に『物知り教育から解放教育へ』という著書がある。この本は自身の教育論集の第1巻にあたり、これを編むに際し選んだ論集タイトルが「共生の教育へ」であった。また、小沢は一九九三年に日本教育学会で行われた第52回大会の全体シンポジウム<共生と教育>の指定討論者として発言しており、その発言をまとめたもの(「教育を再構成する概念」『教育学研究』第61巻第1号、1994年)は、この本にも収められている。ところで、このシンポジウムの記録では、他にも仙田満(「子どもと共生」)、宮澤康人(「共生でいいのだろうか」)、沖藤典子・西村絢子(の各々が「女性論の立場から」)、淡路剛久(「地域・住民論の立場から」)、竹ヶ原幸朗(「アイヌ教育の視点から」)らがそれぞれ教育と共生に関してさまざまなテーマから報告している(さらに、上記の小沢のものと室俊司「討論のまとめ」がある)。そのなかでも、ここでとりあげてみたいのは、宮澤の記録「共生でいいのだろうか」である。

宮澤のここでの問題提起は次の二つ。「(1)共生の問題、とりわけ子供とのそれは、自然との共生とセットにして考えなければリアリティを欠くのではないかということ、(2)いわゆる共生の問題は実は共生という概念でとらえるのは不適切ではないかということ」(前掲『教育学研究』、p.3)である。

もちろん、宮澤のいう「共生」がほとんど「棲みわけのイメージ」と重ねられて理解されている点や「自然と子供と共存するには、人間や大人の側から一方的に歩み寄るしか方法がない」といい、それを「奉仕」や「献身」ということばでよべばすむか[12]、などさらに掘り下げて検討してみるところはいくつかあるだろうが、これらの指摘は、ある面で「教育と共生」という組みあわせの原理的な「難しさ」を示しているようにも思われる。また、ここでの問題は、教育においてリベラリズムとコミュニタリアニズムの関係をどうとらえるのか[13]ということとも重なっているように思う。このような「教育と共生」との

不適切さ・難しさを意識しつつも、以下、本書の読解にあたってみたい。

2．「共生」の両義性をめぐって

> 初日は「共生」ということに私が興味を抱くにいたった一部始終をしゃべることで、このことばが二つの意味―生態学からきた「共生」と社会思想としての「共生」―を含みもっていることを明らかにしました。主役は、竹内敏晴、井上達夫、花崎皋平のお三方にお願いします。二日目は、石原吉郎のエッセイに導かれて、二つの共生の軸となりその発生を促す「孤独」に逢着したのでした。(p.91)

ここで「生態学からきた「共生」」である「《シンバイオーシス》(symbiosis)」と「社会思想としての「共生」」である「《コンヴィヴィアリティ》(conviviality)」の「二つの共生の軸」としてとりあげられているのは、「第２日　孤独と共生」での石原吉郎「ある＜共生＞の経験から」などのエッセイである。そして、このエッセイを読みときながら川本は、次のようにまとめている。

> ＜共生＞の機軸をなす「孤独」、その「孤独」を抜きにしては成り立ちえない「連帯」についての真摯な思索に、私は圧倒されます。私自身が「ささえあい」や「助けあい」といった語句に飛びつきやすいたちなので、＜共生＞のそもそもの出発点にある「お互いがお互いの生命の直接の侵犯者であること」や「孤独」というあり方をついつい見過ごしがちです。石原のエッセイは、「孤独はつらいから、人は共生や連帯を求めるのだ」といった通念がどんなに薄っぺらであるかを深く反省させてくれます。前回、井上達夫さんと花崎皋平さんが生態学からきた「共生」と社会思想としての「共生」を区別したことに触れましたが、石原はそうした「二つの共生」のいわば深奥に「孤独」を直観したんだと言えるかも知れません。(p.27)

確かに、ここで著者によって述べられているような「圧倒」や「反省」は、私自身にとっても痛切に感じるところがあり、ここでさがしもとめている「「共生」の切実な核」(p.18) としての働きを遺憾なく発揮しているように思う。ただ、他方で、「「二つの共生」のいわば深奥に「孤独」を直観したんだ」という点にはすこし疑問も感じる。というのも、ここで石原は、「私が関心をもつのは、たとえばある種の共生が、一体どういう形で発生したのかということである」といい、「たぶんそれは偶然な、便宜的なかたちではじまったのではなく、そうしなければ生きて行けない瀬戸際に追いつめられて、せっぱつまったかたちではじまったのだろう」(石原［1997］p.19) とつづけているが、本当に、「偶然な、便宜的なかたち」ではじまる「共生」はないのだろうか。特に、生態学からきた「共生」においてはどうなのだろうか。また、(もしそのようなものがあるとして、) そこでの「孤独」とはなんなのだろうか、とも思う。

そもそもこのような疑問には、「生態学からきた共生」というのが、「第４日　教育と共生」での浜田寿美男のいう「「生物学的な事実」」である共生（生き物どおしがつながり合ってその生活が維持されていること)」(p.54) や「第６日　エコロジーと共生」でのE･O･ウィルソンの「生物多様性biodiversity」を岸由二が「生きものたちの賑わい」と訳し直したとき、井上達夫のいう《コンヴィヴィアリティ》としての共生が「生の諸様式の雑然たる賑わい」を求めることと「一脈通じるものがあ」(p.83) るという場合の共生とどう重なっていたり（もしくは、異なっていたり)するのだろうか、という問い、さらには、浜田がいう「人間の二重性」(＝「共生－排他の絡み合いの構図を眺め下ろせる人間が、同時にその構図そのもののなかに捕らわれている」p.55) という問題、花崎のいう「国際化社会の矛盾や葛藤を克服する課題から生じた思想としての＜共生＞」は、「人間の内面の意識変革を含む点で前者〔＝エコロジカルな＜共生＞〕と違う」(p.13) ということとどうつながっているのか、などいくつもの関連する問いを誘発するところがあるように思われる。しかし、これらの問いをここでそれぞれの議論に即して明らかにできない今の評者としては、以下、本書がとりあげる二つの共生の視点をふたたび交えることによって「「共生」の両義性」という問題にさらに迫ってみたい。

安部浩は、「自然との共生」という問題に注目し[14]、一方で、今の日本において「共生」ということばがこれだけ氾濫しているにもかかわらず、他方で、な

ぜ、具体的な「問題解決になんらかの仕方で能動的に取り組んでいる人々の数が意外なほど少ない」(安部［2008b］p.73) のかという問いをたて、そこに「日本人の「共生」理解の特殊性」[15] (同p.74) を見、さらには、共生概念の再構築の作業へととりかかる。その際に、「自然科学の齎す最新知見」のひとつである「種間関係における「間接効果（indirect effect)」」[16]」(同p.101) に注目し、さらに、このような「間接効果」を「＜地球共生系の実相＞とでも呼ぶべきもの」と見定め、これに対し「真に適合的であるようなロゴス」(同p.104) として山内得立の「レンマの論理」[17]をとりあげる。このような安部の試みは、先にあげた本書での「伏在する複数で異質なモチーフを読み分けてゆく」(p.4) 上での導きの糸としても一定のはたらきを有しているように思われる[18]。ただし、その際にも、ここで安部が注目するような山内得立の「レンマの論理」を評価しつつも一定の距離をもって対している鈴木亨の議論[19]などとのさらなるつきあわせの作業が必要だろう。それは、著者である川本自身のモットーのひとつとして本書でも言及されているテレンティウスの格言「人間にかかわるどんなことも、私にとって無縁ではない」(p.23) になぞらえて言えば、その「人間」ということばの意味そのものからあらためて捉えなおすことをも含んでいるのかもしれない。

3．「競争」という問題

ところで、本書において「競争」という問題がとりあげられていなかったが、この点について若干不満が残った。というのも、本書でとりあげられている井上達夫＋名和田是彦＋桂木隆夫（以下、井上ほかと略記する）による『共生への冒険』では、共生を語る際に「コンペティション（competition)」と「エミュレーションemulation」の違いに言及しているからである（また、それへの「批判」として本書でとりあげられている最首悟『星子が居る』の「星子の居場所」([1998]p.229-239) においてもこのテーマはとりあげられている)。共生というテーマのなかにどのように競争という問題を位置づけられるか。この書評の最後に、本書からの「脱線」も覚悟で新たな「発見」を目指してこの点について考えてみたい。

本節冒頭でふれた井上ほか『共生への冒険』序章の一節(「競争の質」) において、「エミュレーション」は、「「模倣する、まねる」という意味からからきている言葉」(井上ほか［1992］p.17) として「一億総何々式に動員される競争」といわれている。ちなみに、このような競争の具体例として、彼らはビール会社のドライ競争をあげている。また、他方で、「コンペティション」については、「共に（com）探し求める（petere)」(同、p.18) 営みとし、「目標そのものをめぐって、人々が自律的に探求し、共同実験し、相互に論争する不断の実践」(同、p.19) であり、そこでは「「よき人生」についての多様な解釈、多様な実践が競合することにより、人々が相互啓発し、自分たちの人生を相互豊穣化する」と述べている。まさに、「「共勝ゲーム（win-win game)」こそ、コンペティションの真髄」なのだ、と。

しかし、このような理解とは異なるものもある。たとえば、堀尾輝久は『日本の教育』([1994]310-312) において、一見全く正反対の理解を示している。つまり、「コンペティション」[20]を「相手を蹴落とす競争」や「同調的競争」とし、「エミュレーション」を「切磋琢磨し合いながら、励まし合いながら競い合う競争」として肯定的に言及する。その際、このような「エミュレーション」の使い方として、ルソー『エミール』やコレージュ・ド・フランスでの「未来の教育のための提言」(1985年２月。ピエール・ブルデューらが関わった）などでの使用例をあげている[21]。

このように、一見、両者は、「コンペティション」と「エミュレーション」の理解が反転している。しかし、両者の対立はどちらかに軍配をあげるような類のものだろうか。むしろ、どちらの競争も度を越せば両者がそれぞれに考えているようなネガティヴな結果を引き起こす競争へと転落するとは考えられないだろうか。だからこそ、このような転落を防ぐためにも、本書で、著者自身が問いつづけてきた「「共生の技法」であるケアと（井上達夫さんふうには）「共生の作法」ともいうべき社会正義との両立・共存の可能性」(p.45) とをあわせて探りつづける必要があるのではないだろうか[22]。

ここまで、二つの競争(「コンペティション」と「エミュレーション」) についての二人の論者の一見すると対立・反転する問題をとりあげ、しかし、両者のどちらかに軍配をあげてすむ問題ではないのではないかとし、むしろ、この問題を共生と「つなぐこと」

の必要性を述べた。このような主張の後に、以下のような展開をみせれば誤解される向きもあるかもしれないが、私自身としては、井上ほかで主張された「エミュレーション」が「「模倣する、まねる」という意味からきている言葉」だから「一億総何々式に動員される競争」だとして否定的にのみとらえられているのだとするとその点にはやはり不満が残る。もちろん、これまでの歴史を振り返ってみてもこのような例は枚挙にいとまがないようにも思われる。その意味でも、井上ほかが指摘する課題を十分に受けとめる必要があるだろう。ただ、そのことをもって「模倣する、まねる」ことが否定されてしまっては、教育学者を志す者としては立つ瀬がない。むしろ、ここまで、本書とあわせてこの書評を注意深く読んできてくれた聡明な読者の方々はすでにお気づきのこととも思うが、まさにこのような「模倣する、まねる」を意味する「まねび＝学び」を「まなびほぐす」ことこそが必要なのではないだろうか。そのことは、本書「あとがき」において、川本が注目する「〝暮らしのおもり〟（鶴見俊輔）を我が身に帯び」(p.153)ること、さらには、その典拠先でのことば「暮らしのおもりのある学問」（鶴見［1992］p.229）を創造することともつながっているように思われる[23]。

（宮城　哲）

注

1）川本隆史『共生から』岩波書店、2008年。以下、本書からの引用は、後ろに頁数を挙げる。

2）本稿は、2008年７月16日の第３回総合演習での報告をもとに、その場でのやり取りもふまえて書き改めたものであることをお断りしておきたい。

3）詳しくは、川本隆史『ロールズ――正義の原理』講談社、2005年、p.180-195を参照。

4）川本隆史「法と倫理」（加藤尚武ほか編『現代世界と倫理』晃洋書房、1996年、p.186-209）、川本隆史編『応用倫理学講義４　経済』岩波書店、2005年

5）川本隆史「“不条理な苦痛”と「水俣の痛み」――市井三郎と最首悟の“衝突”・覚え書」（飯田隆ほか編『岩波講座 哲学 01――いま〈哲学する〉ことへ』岩波書店、2008年、所収）

6）詳しくは、徐京植『半難民の位置から―戦後責任論争と在日朝鮮人』影書房、2002年を参照。この件に関する花崎自身の総括は、花崎皋平『〈共生〉への触発――脱植民地・多文化・倫理をめぐって』みすず書房、2002年に見られる。

7）加藤尚武『応用倫理学のすすめ』丸善ライブラリー、1994年、p.185

8）川本隆史『現代倫理学の冒険―社会理論のネットワーキングへ―』創文社、1995年、p.115-116

9）この点について、第３回総合演習において著者から頂いた回答は、むしろ「合意してない」ことを顕在化させていくことも応用倫理学の一つの仕事であるというものであった。この回答は評者をはっとさせるものであった。ただし、現時点では本文における評者の主張はそのままにしてある。

10）川本隆史『共生から』岩波書店、2008年。以下、本書からの引用は、後ろに頁数のみを示す。この書評は、2008年７月16日に行われた第三回総合演習での報告をもとにしている。また、その際、著者よりなされたコメントや報告「相生・舫い・共生―《暮らしのおもり》はつけられたか」などからも多くを学んだ。

11）タイトルにもつけた「まなびほぐす」とは、本書の「補講　人間の権利の再定義」で著者の使った三つの道具だての一つ「編み直しunthinking」の際に参照した鶴見俊輔が、ウォーラーステインの「unthink」を訳し直すときに重ねあわせた次のような自身の体験（ヘレン・ケラーとの出会いの経験）から借用している。「一九四一年夏、わたしがまだ一九歳でハーヴァード大学の学生だった頃、図書館で本を運ぶアルバイトをしていたんです。そこにヘレン・ケラーさんが来たんですね。ケラーさんは、目が見えない、耳が聞こえない、しゃべれない、三重苦の人です。…その時ケラーさんがわたしに質問したんです。自分はハーヴァード大学の兄妹校のラドクリフ女子大学で勉強した。そこでたくさんのことを学び、自分の学んだたくさんのことを振りほどかなければならなかった。彼女は、“I learned many things, and I had to unlearn many things.”と言ったんです。いや、なるほどなと思いました。ラドクリフ女子大学はハーヴァード大学の兄妹校ですから、そこでの講義は、耳が聞こえて、本が読めて、しゃべれる人が対象で、概念の組み立てもそうなっている。しかしケラーさんは、そこから離れて生きるようになって、自分の身の丈に合わせて概念をたちなおさなければならなかった。この「概念をたちなおす」、つまり“learn and unlearn”というのは、一度編んだセーターをほどく、ほどいた同じ糸を使って自分の必要にあわせて別のものを編む、そんな感覚ですね。私には、なるほどとうな

ずける、とてもおもしろい話でした」(鶴見［1994］p. 4-5)。

12) 例えば、本書「第７日　「あなたを苦しめているものは何ですか」」でもとりあげられている最首悟と娘・星子との関係をここで宮澤のいう「奉仕」や「献身」ということばで語ることはたやすいのかもしれないが、そうすることによって「言葉なく語りかける」彼女との共に居ることの「重み」や本書「第１日　「共生」の両義性」でとりあげられた竹内敏晴がいう「共生態としてのからだ」の問題、または、それらのこととともつながっている「共感」の問題など別の意味での豊かさをそぎ落とすことにもなりかねないように思う。ちなみに、「共感」については、本書でもとりあげられている浜田寿美男が別のところで述べた「共感を問う」(浜田［1993］p. 82-97) が先にあげた「共生態としてのからだ」の問題とも重なって参考になった。

13) この問題については、今井康雄の次の発言が参考になった。「今井（教員）は、リベラリズムとコミュニタリアニズムの関係は教育哲学の観点から見れば、異なる様相で捉えられると発言し、以下のように述べた。すなわち…どんな正義や価値であっても、現実の教育実践の場ではおしつけになる。そこではそもそもリベラリズムは成り立ちようがなく、共同体論の方がある意味では一貫している。何が善かということが公正さとは別に既に決められており、教育の場において子どもには選ぶことのできないものとして押しつけられざるを得ない。コミュニタリアニズムとリベラリズムの問題は、教育においては政治とは違った様相で出てくる、ということであった。また今井は、ここでいうリベラリズムとコミュニタリアニズムの違いというのは、他者の承認を出発点とするかどうか、つまり、リベラリズムでの尊厳というのは最初から承認を必要としないが、テイラーにとっては承認が必要で、そこには文化的な基盤が必要である。国民の教育権論は、リベラリズムにおいては前提となっている尊厳をどう保障するかということに関わるものだが、何が学習されるべきかという教育の具体的な内容を議論するレベルでは必ず善の問題が現れてくる。つまり、教育の保障という枠組みはリベラルな原理によって構成されているが、中身となる学習内容は共同体論的な原理に依拠していると言えるのである、と指摘した。」「1999年度　大学院総合ゼミの日程と記録　第２回」『教育科学研究』第18号（東京都立大学人文学部教育学部研究室、2001年、p.64)

14) ここでは、安部［2008b］を中心に議論を展開するが、安部［2001］、［2005］などでも同様の論点について検討している。また、以前からとりくんでいるハイデガーの研究（まとまったものとして安部［2002］）からの展開として、ハンス・ヨナスの哲学の検討（安部［2008a］、［2008c］）があり、これらの研究もこの問題と関連しているように思われるが、この点について今後さらに詳しく検討してみたい。

15) 安部は、このような日本人の特殊な「共生」理解を根本的に規定している二つの要素として、「無政府主義的「共生」観と「縁起」の原理に基づく仏教的「共生」観」(安部［2008］p.98）をあげている。

16) 「当該二種の一方が他方に対し、第三の種を介して間接的な仕方で及ぼしあっている影響」(安部［2008］p.102) のことで、その具体的な例として堀道雄などの研究をあげている。

17) 「或る対象に関する言明を四つの句（レンマ）に分割して行うような命題の形式」（＝テトラ・レンマ）のことで、龍樹の『中論』などにみられる。「基本的には、『中論』の論述は以下の四つのレンマから構成されるのである―(１）肯定（ＳはＰである)、(２）否定（Ｓは非Ｐである)、(３)肯定と否定とを同時に肯定する両是の主張（Ｓは＜Ｐにして非Ｐなるもの＞である)、(４)肯定・否定の双方を共に否定する両否の主張（Ｓは＜Ｐでもなく非Ｐでもないもの＞である)」(安部［2008］p. 108)。このような龍樹『中論』での論法の（３）と（４）を逆にしたものこそ山内の「レンマの論理」である。詳しくは、山内［1974］を参照。

18) 安部のこの論文では、本書「第１日　「共生」の両義性」の末尾に附された「文献データ」でもとりあげられている有島武郎の「共生農園」や椎尾弁匡の「共生」についても注15で言及した二つの共生観との関連でそれぞれ検討されている。

19) 鈴木は本書でもとりあげられている花崎皋平との対談(鈴木・花崎［2002］）において、山内の「レンマの論理」に言及しつつ、その論理命題の配列の順序（(３）と(４))をめぐって見解を異にしている。鈴木の主な議論については『鈴木亨著作集』全五巻（三一書房、1996-1997年）にまとまっている。ちなみに、花崎は［2001］において、山内と鈴木の見解の相違についていまだ判断を留保しているように思われる。

20) 堀尾［1994］では、「competiton(conpétiton)」「emulation（émulation)」と英語・フランス語の両方があげられているが、ここでは、これまでのこの書評での表記にあわせそれぞれ「コンペティション」「エミュレーショ

ン」とする。

21) さらに言えば、田中智志が、OED[1991]をひきながら、両者の違いについて、「competitionはもともと「他者がえようと努力しているものをえようと努力する行為」を意味し、その語源は「ともに一つのものを求めあう」を意味するラテン語のcompetereである。emulationの語源は「負けまいとする」「熱心にまねをする」を意味するラテン語のaemulus (emulous) である。」としながら、前者を突き動かすのは「達成欲望」、後者を動かすのは「模倣欲望」とし、前者を「勝者（強者）／敗者（弱者）という階層秩序を生み出す競争」、後者を「切磋琢磨という自己形成を生みだす競合」と区別している（田中［2005］p.132-133）。また、井上ほか［1992］に言及したものとして、岩川［2000］、堀尾［1994］に言及したものとして西平［2005］［2006］などがある。

22) ちなみに、最首は、先にあげた文章の末尾で「当然にも、そのような（星子との）「共生」には生きる目標などはありません。目標を探して競うということもありません。「ゆたかさ」とか「ゆったり」とかいうことはめざしたとたんに到達できないようになっていると思います。さて、と、困っているんだか困っていないんだか、自分でもよくわからないんです」（最首［1998］p.239）と締めくくっている。このことは、井上ほかのいう「競争conpetition」と一定の距離をとっているのだと思う。しかし、他方でこのような星子の生を「その世」のものとして（もちろん「あの世」とは異なりながらも）「この世」とも区別していることにはなお注意しておかなければならないと思う。つまり、井上ほかで述べられていることを単純に否定すればすむと考えているようには思われない。

23) このような「〝暮らしのおもり〟を我が身に帯び」たことばとして、本書「第４日　教育と共生」の末尾でとりあげられた宮澤賢治の手紙があろうかと思うが、さらに評者としては、児童文学翻訳家・評論家である清水真砂子がとりあげた母親を航空機事故で亡くした小学五年生（松田利可さん）が記者会見で「しっかりした口調で、たしかに言った」という次のことばも書き添えておきたい。「お母さんの分まで楽しんで、苦しんで、生きていきたい」（清水［1999］p.90）。

文献

・安部浩［2001］「「自然との共生」について考える」石崎嘉彦・石田三千雄・山内廣隆編『知の21世紀的課題：倫理的な視点からの知の組み換え』ナカニシヤ出版
・――［2002］『「現」／そのロゴスとエートス―ハイデガーへの応答』晃洋書房
・――［2005］「共生から共生の存在論へ」竹市明弘・小浜善信編『哲学は何を問うべきか』晃洋書房
・――［2008a］「ハイデガーからヨナスへ」『創文』五月号（No.508）創文社
・――［2008b］「現代日本において「共生」は何故かくも流行しているのか―にも拘らず環境保護運動は何故かくも低調なのか―」小川侃『京都学派の遺産―生と死の環境―』晃洋書房
・――［2008c］「地球環境学の構想と予防原則の形而上学的基礎づけ―H・ヨナスの「未来の倫理学」の一解釈―」『文明と哲学』第１号、日独文化研究所
・石原吉郎［1997］『望郷と海』（学芸文庫）筑摩書房
・井上達夫＋名和田是彦＋桂木隆夫［1992］『共生への冒険』毎日新聞社
・井上達夫［1998］「共生」『哲学・思想事典』岩波書店
・岩川直樹［2000］『総合学習を学びの広場に』大月書店
・小沢有作［1994］『物知り教育から解放教育へ』（小沢有作教育論集 共生の教育へ＜１＞）明石書店
・川本隆史［1997］「老いと死の倫理：ある小児科医の思索を手がかりに、」『倫理と道徳』（現代日本文化論９）岩波書店
・――［2000］「自己決定権と内発的義務―＜生命圏の政治学＞の手前で―」『思想』２月号（No.908）岩波書店
・鈴木亨・花崎皋平「対談 哲学することの根源へ―空の大悲への応答」『講座生命６』河合文化教育研究所
・最首悟［1998］『星子が居る：言葉なく語りかける重複障害の娘との20年』世織書房
・清水真砂子［1999］『学生が輝くとき』岩波書店
・佐伯胖ほか［1998］『いま教育を問う』（講座　現代の教育第１巻）岩波書店
・田中智志［2005］『臨床哲学がわかる事典』日本実業出版社
・鶴見俊輔［1992］「暮らしのおもり」、安田常雄・天野正子編『戦後「啓蒙」思想の遺したもの』久山社
・――［1994］「Unthinkをめぐって―日米比較精神史」『リベラリズムの苦悶―イマニュエル・ウォーラーステインが語る混沌の未来』阿吽社
・中村雄二郎［2002］「鈴木亨・花崎皋平対談「哲学することの根源へ―空の大悲への応答」にふれて」『講座生命６』河合文化教育研究所
・西平直［2005］『教育人間学のために』東京大学出版会

・――［2006］「競争・自信・劣等感―競争心をめぐって―」『教育展望』52－１、教育出版
・花崎皋平［1997a］「場所と自由」『相対主義と現代世界―文化・社会・科学』（唯物論研究年誌第２号）青木書店
・――［1997b］「共生の思想」『コンサイス20世紀思想事典＜第２版＞』三省堂
・――［2001］「述語論理とレンマの論理」『講座生命５』河合文化教育研究所
・――［2003］「身体、人称世界、間身体性―親密圏の基礎を問う―」齋藤純一『親密圏のポリティクス』ナカニシヤ出版
・浜田寿美男［1993］『個立の風景』ミネルヴァ書房
・堀尾輝久［1994］『日本の教育』東京大学出版会
・山内得立［1974］『ロゴスとレンマ』岩波書店